

A 178 食生活の構造に関する研究 (VI) - 家族と米飯がおよぼす自給食品への影響 -  
共立女子短大 O. 黒澤 美智子 泉谷 希光

目的：農家の食生活は、穀類、いも、豆、野菜類などの自給によって支えられてきたが今日では、農村にも自給食品と競合する食品を含めて、多様な食品が市場を通して流入してきた。農外所得は増加しつづけ、現金の自由度が高まった農家は、それらの市場食品を容易に買い求める傾向が強まってきた。そのような現状においても農家が自給生産している米や野菜類が、食生活にどのように機能しているかを解明しようとして本研究を行った。

方法：新潟県刈羽郡小国町の乙地区において、無作為抽出した農家37戸について自家用飯米の生産と消費形態、および自給食品の生産と消費について調査した。調査方法は、面接聞き取り記入方法によって行った。

結果：(1) 夏季における調査農家の一人一日当たりの米飯摂取量は、家族構成員数が少ないほど多く、員数が多くなるほど少ない。

(2) 調査農家の一人一日当たりの米飯摂取量が比較的少ない農家は、米飯摂取量に比例して一農家当たりの自給食品数も多い。しかし一人当たり300g以上になると、米飯摂取量が多くなるに従って、自給食品数も減少している。

(3) 同じ町内であっても、社会・経済的条件によっては異なり、比較的市場環境や交通の便がよい地区では、自給食品の生産が米飯の摂取量とは無関係に行われている。

(4) 自給食品の生産の範囲は、家族構成員数との関連がみられ、員数が多くなるほどバラエティーに富む、という傾向がある。すなわち、家族の文化的欲求が生理的充足に先行した形態の食生活志向がみられる。